

新聞投書を利用したジェンダー意識調査の意義：  
調査が無効となる日

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 滋子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00000459">https://doi.org/10.14945/00000459</a>

# 新聞投書を利用したジェンダー意識調査の意義\*

## —調査が無効となる日—

熊 谷 滋 子

### はじめに

新聞投書（以後、投書とする）は、時代や社会を映す鏡であり、市民の思いが表現されるものである。様々な研究が、投書を引用したり、調査対象としながら行なわれるようになってきており、投書への関心も高まってきている。フェミニズムの視点、ジェンダー研究からも投書は興味深い研究対象となっている。ジェンダー視点からみた投書の文体の研究は、国緒（1987）、佐竹（1995）、日尾（1996）、熊谷（1996）などでなされている。詳細はそれらを参照されたい。

本稿では、投書の文体自体の研究というよりも、投書を利用したジェンダー意識調査（以後、投書調査と略す場合がある）の意味、意義について論じていきたい。投書調査は、3で後述するように、1995年、ふとしたことがきっかけで始め、その後これまで8年も続けてきたものである。文章から書き手の性が推測できるかという素朴な疑問から端を発したこれまでの投書調査について、本稿では、調査の有効性について総括しつつ、検討していく。これまで、1995年に行なった調査は熊谷（1997）において、1999年から2001年にかけて行なった調査は、熊谷（2002）においてまとめながら論じているが、それ以外の調査については、全体としてまとめておくことがなかった。本稿では、最近の投書調査をまず紹介しつつ、さらにこれまで行なってきた投書調査をあらためてフォローしながら、調査活動に関わらざるをなくなっていった個人的動機を語ることを含め、調査の進め方の変化、推移、および調査自体の可能性と限界についてとらえなおしてみた。そして、自己矛盾になるが、副題で示したように、ゆくゆくは投書調査が無効になる日がくることを心の中では願っている。

なお、本稿は次の3点を中心に論じていく。第1に、2003年に行なった投書調査を報告する。これまでは、もっぱら大学生を対象として調査してきたが、浜松市男女共同参画室のご協力のもと、女性学級の受講生である社会人女性（30代～70代）を対象に調査を行なう機会を得ることができた。その結果をみなが

ら、大学生と社会人女性のジェンダー意識を比較検討する。第2に、1995年以降行なってきた、投書調査（6種類）を紹介し、その傾向を探る。その上で、投書の文体・内容のパターンに対する書き手の性をめぐる判断根拠を検討しながら、投書調査が現時点で有効であることを示したい。第3に、投書を利用した意識調査の方法についての有効性について論じていく。

これまでまとめた投書調査でも繰り返し強調してきたことだが、今回も確認しておきたいことがある。投書調査は、大学生や社会人女性の方々の協力なしには成立しえないものであり、また、このような調査の意義を考える機会もなかっただろうということである。特に自由記述欄に書かれている回答者となってくれた方々の率直な意見やコメントの一つ一つが貴重なものとして評価できるものである。よくぞホネを言ってくれたと思うことはあっても、それに対して、意識が低い等の非難をするつもりは毛頭ないし、すべきものでもないということを申し添えておきたい。むしろ、調査している私の方が、いかに自らの内にステレオタイプの発想を深く内面化させてきていたかに気づかされるが多かった。そういう意味で、投書調査は、調査者と回答者の共同作業で成立するものであり、本研究も共同作業の成果であると思っている。

## **1. 2003年の投書調査結果：大学生と社会人女性を対象として**

### **1. 1 書き手の性別と年齢に注目**

前述したように、これまではもっぱら大学生を対象に投書調査を行ってきたが、社会人女性を対象に調査できる機会を得た。そこで、これまでは、投書の書き手の性別のみを唯一の要因として対象とする投書を選んできたが、今回は、さらに、書き手の年齢を50代以上に限定し、回答者の判断に年齢という要因で差が生じてくるかという点をも考慮してみることにした。つまり、書き手の年齢に近い方が性別判断しやすくなるかという点である。今回は、20歳前後の大学生と30代から70代までの社会人女性ということで、回答者の年齢の巾が広がり、そのメリットを活かそうと考えた。

今回、調査対象とした投書は、これまでの調査をふまえ、次の3点を念頭に入れて選んだ。1点目は、前述したように、書き手の年齢である。50代以上の書き手の投書だけを選ぶことにした。2点目は、「だ・である体」で書かれた投書のみ限定した。これまでの調査から、個人的事柄（書き手の体験談や身内）への言及がない限り、特に「です・ます体」は女性と判断する傾向にあったからである。3点目は、書かれている内容について、いわゆる男女の典型的パター

ンを極力排除しようと考えた。政治・経済・労働等の公的領域としてみなされている内容を扱っていけば男性、家庭・教育・人間模様等の私的領域としてみなされている内容を扱っていけば女性というパターンである。具体的な典型的パターンの投書例は資料(1)にあげているので、そちらを参照されたい。これまで新聞に掲載された全ての投書について書き手の性と投書内容のパターンの割合を調べたわけではない。しかし、これまでの投書調査から、典型的パターンの投書に対する判断が、ある程度存在していることが分かっている。典型的パターンについて、服装のことにあてはめて考えてみると、現在の日本社会において、ほとんどの人は、スカートをはいている人をみれば女性だと判断する。実際にスカートをはく女性の女性全体に占める割合は分からないし、その割合が増加しているのか減少しているのかも分からないが、少なくともスカートをはく人は女性だというパターンに異論を唱える人はいないだろう。服装とはちがって、投書の内容については、私的領域を扱うのは女性だけということはないが、性と内容の典型的な結びつきという点で、今回の調査対象の投書から除外した。

以上の3点を考慮に入れて、今回調査対象とした投書のタイトルは以下の通りである。書き手の個人情報、性、年齢、職業のみをあげている。カッコの中は、掲載年月日である。本稿で扱う投書は全て『朝日新聞東京本社版』のものである。実際の投書は資料(2)にあげているので、そちらを参照されたい。

- |                |               |                |
|----------------|---------------|----------------|
| ①介護の重圧は解消できるか  | 男性・81歳・大学名誉教授 | (1995. 10. 14) |
| ②現代人いやすラジオ深夜便  | 男性・53歳・会社嘱託   | (1999. 10. 3)  |
| ③ギンナン拾い秋の味楽しむ  | 男性・60歳・会社員    | (1999. 10. 7)  |
| ④核兵器「違法」英判事に拍手 | 女性・89歳・主婦     | (1999. 10. 27) |
| ⑤不況の景色を旅行先で見た  | 女性・61歳・看護婦    | (1998. 10. 14) |

これらの投書は、男女どちらかのイメージに結びつきやすい要因（文体、内容）を極力除いたため、これまで以上に判断が難しいものになるだろうと予想した。

投書調査の方法は、書き手の情報（住所、氏名、年齢、職業等）を伏せて、書き手の性を推測してもらおう。その際、性を判断した理由（語彙、言い回し、表現、内容等）を自由に書いてもらうことにしている。

今回回答者として調査に協力してくれたのは、静岡大学の学生73名(20歳前

後、男性 30 名、女性 43 名) と浜松市女性学級を受講している社会人女性 78 名 (30 代 5 名、40 代 11 名、50 代 19 名、60 代 32 名、70 代 11 名) である。調査時期は、2003 年 1 月から 2 月にかけて行なった。ちなみに、学生の約半数は、ジェンダーを扱っている授業の受講生である。社会人女性は、担当者を通して依頼したため面識はなかったが、男女共同参画社会を目指して活動を行なっている、ジェンダー問題に関心の高い方々である。

## 1. 2 調査結果

今回実施した調査結果は、表 1 の通りとなった。

表 1 2003 年投書調査結果 ( ) 内は%

回答者	学 生 (73 名)		社会人 (78 名)		正 解
	男 性	女 性	男 性	女 性	
判断した性					
投書番号					
①	<u>65</u> (89.0)	8(10.9)	<u>68</u> (87.1)	7( 8.9)	男性・81 才・大学名誉教授
②	16(21.9)	* <u>57</u> (78.0)	23(29.4)	* <u>50</u> (64.1)	男性・61 才・会社員
③	<u>54</u> (73.9)	19(26.0)	<u>42</u> (53.8)	29(37.1)	男性・53 才・会社嘱託
④	* <u>45</u> (61.6)	24(32.8)	33(42.3)	<u>35</u> (44.8)	女性・89 才・主婦
⑤	21(28.7)	<u>50</u> (68.4)	11(14.1)	<u>60</u> (76.9)	女性・61 才・看護師

下線部は判断が多かった性

\*は実際の書き手の性と異なる場合

全問正解者 (5 通の投書全部の書き手の性を当てた人) は、偶然にも女子学生 3 名、社会人女性 3 名であった。今回調査対象とした投書は、男女のイメージに結びつきやすい要因を極力はずしたにも関わらず、2 で説明するように、これまで行なった調査の正答率と比べて、極端に落ちることはなかった。つまり、今回の投書が判断しにくかったということでもなかったといえる。

今回の調査の注目点としてあげた、書き手の年齢に近い方が判断しやすいかという点についても、結果からみえてくるのは、数値の上での全体的傾向としては、大学生も社会人女性も共通しているということである。個々にみれば、多少のばらつきはあるし、大学生の方がどちらかというと一方の性に判断が偏る傾向があるものの、全体的には、共通している。年齢によって判断に差がでるわけではないということが分かる。

投稿者に対するイメージも共通しており、男性ならばサラリーマン (または退職者)、女性ならば (専業) 主婦である<sup>(1)</sup>。この点は、熊谷 (1997) で報告し

た投書調査での投稿者のイメージと同様である。詳細は省略するが、投稿者に対するイメージの背景には、性別役割分業体制によって形成されてきた成人男女をめぐるパターン、つまり、「男は仕事、女は家庭」が存在している。しかも、成人女性については特に、家事・育児に専念してきたために、社会的な問題についてはあまり関心がないか、無知であるという否定的なイメージになりがちである。

判断根拠については、1. 3で詳しく扱うが、判断された性と実際の書き手の性のズレについて、若干の説明をあらかじめ加えておきたい。まず、判断がはずれた投書②の書き手は、NHKのラジオ深夜便の「大ファン」であり、番組の中で紹介されるリスナーからの手紙に、現代社会の生きにくさを痛感し、そんな時代だからこそ、人の心をいやすものとして、当番組に期待する気持ちを綴っている。この投書であげられている人は、皆女性であり、亡き母も当番組のファンだったことも紹介している。この投書は、心情を綴ったものとして、また、女性のみが言及されているということで、大学生も社会人女性も書き手を女性と判断している。今回対象とした投書は、内容からも男女の典型的パターンを避けたと述べたが、まさに②の投書は、逆典型的パターンの例ともいえる。

また、投書③④については若干差がみられる。投書③では、書き手が夕方のランニング中にギンナンを拾い、それを絵に描いたり、フライパンで煎って食べたりしていることを伝えている。そこでは、調理方法が書かれているせいか、書き手が女性とも考えられるため、特に社会人女性は、男性とする判断が少なめになったと思われる。投書④は、英国での核軍縮運動に共鳴している女性たちを支持する内容であり、国際政治に関わるテーマゆえ、男性と判断しがちであるが、社会人女性と女子学生は特に、同性を支持しているということで女性とも考えられるとしている。そのため、社会人女性の方が女性と判断する側が男性と判断する側よりかろうじて上回っている。

今回、書き手の年齢を50歳以上に限定したが、大学生も社会人女性も、中高年が書いたということを認識していることが判断根拠に示されている。具体的にみると、語彙・表現でいえば、投書①では「他家に嫁した」「孫娘」、投書②では「かかずらう」「よすが」、投書③では「同好の士」、投書⑤では「冷めた汁」「年金組」等が中高年を感じさせるものとしてあげられている。内容については、投書①では、知人が80歳であること、投書②では、亡くなった母のことが書かれている、投書③では、夕方ランニングができて夜明けにギンナン拾いに出かける人、投書⑤では、(格安)パック旅行に参加している、等の点から、中高年と判断している。

1. 3で紹介するように、大学生も社会人女性もともに、投書の文章から書き手の性を推測するよりも年齢を推測する方が易しいと感想を述べている。このことは何を意味しているのだろうか。ここで、田中（1999:1）が指摘している「位相」「位相差」の定義を紹介したが、若干の論及もしていきたい。

ことばには、性別や世代の違いによって、あるいは社会階層・職業などの違いによって、さまざまな差異や対応がみられる。（中略）

一方、話しことばと書きことば、詩歌と散文など、表現形式の違いによって、ことばの差異や対立がもたらされることもある。演説には演説特有の、また手紙には手紙独特のことばが用いられるというように、場面によって違いが生じる場合もある。

このように、社会的な集団や階層、あるいは表現上の様式や場面それぞれにみられる、言語の特有な様相を「位相」と言い、それに基づく、言語上の差異を「位相差」と呼ぶ。

言語研究において、日本語の話しことばには性差が存在しているといわれてきたが、社会との関わりからことばをみていく際に、日本語における「女ことば」の成立過程、その研究の前提とする発想、実態については様々な研究が行なわれてきたことは周知のことである。最近のものでは、中村（1995, 2001）や遠藤（1997）、現代日本語研究会編（1997）等がある。

日本語の特に話しことばにおける「女ことば」について、金水（2003）が、印象的に命名している「ヴァーチャル日本語」の一つとも考えられる。ここでは、投書という書きことばを扱っているため、金水氏の指摘があてはまらないかもしれないと考えるむきもあるだろう<sup>(2)</sup>。しかし、今回の投書調査からみえてくるのは、位相といっても、性差と世代差には質的な差があるのではないかということである。ことばの特徴の一つとして、例えば単語などが時代の変化とともに意味や含みが変わってきたり、単語自体が生まれたり、消えていく（死語）ことがよくあげられている。

今回行なった投書調査において、大学生も社会人女性もともに、性別よりも中高年が書いたものだと判断しやすかったとする印象をもったとするならば、少なくとも、投書という書きことばにおいて、性差よりも世代差が明示的なのではないかということが分かる。つまり、投書の場合、書き手の世代については、語彙も含め、形式的な部分で確認できるものがあるのではないかと思われる。

る。換言するならば、今回の調査でも性差については、「男は論理的、女は感情的」といったようなイメージが根強くあるが、世代差については、「中高年はこういう単語を使う」という感想はあっても、仮に「中高年は論理的、そうでない者は感情的」といったイメージは出されなかったことからいえる。この点については、「位相」との関わりで、さらに調査していく必要がある。ちなみに、今回対象とした投書は、あくまで書き手の年齢だけに注目して選択しており、中高年が使いがちと思われる語彙や表現を吟味した上で選択したわけではないことをつけ加えておきたい。

### 1. 3 判断根拠からみえてくること

数値の上では大学生と社会人女性の間には決定的な差はなかったが、自由に記述してもらった判断根拠についてはどうだろうか。イメージされている投稿者は、男性ならばサラリーマン（退職者も含む）、女性ならば（専業）主婦という点でも共通している。

まず、判断根拠としてあげられているものに共通している事柄を中心にまとめるが、男子学生のみ、女子学生のみ、社会人女性のみは、それらの記述の直後に、それぞれ（m）、（f）、（A）と付加する。以下に示す判断根拠は、正解か不正解かは問わずに男性、または、女性と判断した根拠に書かれていることをまとめている。

	男 性	女 性
語彙・文体	「うまい」 だ・である体 力強い、堅苦しい、断定的、淡々としている  漢字が多い（f）、知的（f） まわりくどい言い回しが少ない（f）	やわらかい、やさしい、あいまい、断定的ではない  ひらがなの使い方（f） <sup>(3)</sup> 、丁寧（m） 体言止め（m, f）
内容・論理展開など	客観的、論理的、冷静、感情的な部分が少ない、自分の意見を述べている  専門知識がある、政治・経済のことに詳しい  社会情勢をよくみきわめている、社会との関わりがある 視野が広い、全体的にみている	感情的、心情的、情緒的、感情移入している  政治のことは分からない、業界のことはわからない（A）、難しい話をしない（f） 専門家のもつリアリティがあまりない（f）  料理に詳しい、家計を預かる  細かい



個々の投書についてあげられているもの

投書	テーマ	男 性	女 性
①	介護	制度から考える、他人事、切迫感がない	介護で苦勞している
②	ラジオ深夜便	男性は仕事があるので遅くまで聴けない(f) 母のことを思うのはマザコン(m)	主婦は夜更かしができる(f)
③	ギンナン	夕方ランニングできるのは男性、ギンナンの調理法は男のもの(f)	女性は夕方家事で忙しい(f, A)
④	核兵器		同性に強く共感(f, A) 女性の書き手であってほしい(A)
⑤	旅行	業界のことを考えている	バック旅行にいけるのは女性(f, m) 男性は働いているので行けない

以上の判断根拠からみえてくることは、まず第一に、これまでの調査にも登場してきたもので、例えば、語彙・文体では、「男は力強く、女はやさしい」、内容・論理展開等では、「男は論理的、女は感情的」「男は専門知識があり、視野が広いが、女は政治のことは分からず、細かいところをみがち」というパターンである。このようないわゆるステレオタイプの発想については、特に社会心理学者などが精力的に研究し、論じてきている。2. 2で一部扱うが、上述した発想は、近代的、いわゆる二項対立的図式が、性別役割分業体制とうまく結びつき、男女をめぐるイメージに色濃く反映していることが分かる。

第二に、投書②と④に対する判断にみられるように、内容・テーマに性別分業が存在している、または、そのようなイメージをもっているということが分かる。政治は男性、人間模様は女性というイメージである。しかし、投書④について、特に女子学生、社会人女性が強く思っていることとして、政治を扱っていても、女性が行動をおこしている場合、同性として強く支持しているのではないかと判断している。これは、女性のおかれた社会的立場の相対的な弱さを認識しているがゆえに、社会的行動を起こす女性に賛同する気持ちが強く働いて、回答者自身も支持したくなったのかもしれない。

さらに、投書④に関して社会人女性が特に指摘していることをあげると、核兵器関連のテーマは「女性は好まない題材。核の話はきらい、分かりにくい」等が述べられているが、一方で、「でも、この文章を女性が書いたと誰もが思う時代を女性として望む」「このような投書が出来る女性をもっとふえてもいいと

思う」という願望が述べられてもいる。この点は、男女共同参画社会を推進しようとしている日本社会における意識の高まりを示すものと考えられる。書き手の性の推測は、「～であるから女（男）」という視点だけではなく、「～であってほしいから女（男）」という願望によってもなされている。

さらに、投書③に関わって、鋭く指摘されていることを紹介する。ギンナンの調理法をフライパンで煎ることに注目し、特に女子学生は「酒のつまみ」程度であるため、男性と判断している。他の事柄も判断材料となっていると思われるが、男子学生と社会人女性は、意外にも、料理について書かれているため女性と判断する人が少なくなかったということを考えあわせると、女子学生の方が、料理に対する性差の実態をクールにみつめているのかもしれない。

第三に、今回の調査結果は、大学生と社会人女性は共通していると述べてきたが、判断根拠をさらに詳しく読んでいくと、書き手の年齢に近い程、回答者自身の体験を語る傾向にあることが分かる。投書の内容に触発されて思わず自身の経験や見聞きしたことなどを綴りたくなっただろう。例えば、介護問題を扱った投書①では、「男性は介護から逃げます」「女性が介護してあたりまえの云い方」と述べたり、自身がまさに介護の真っ只中であるための苦労を書きつらねている。投書②では、ラジオ深夜便を自身も日頃聴いているとする記述が少なくなかった。

投書③では、夕方ランニングができるのは男性で、「日常の家事の心配もなく楽しむ様子」があることや、「奥さんが夕食の準備中に一人走っている」男性の例もあげている。よく言われてきた「女の家事には定年がない」とする状況に対する不満が出されている。投書⑤との関連では、年金を含め、老後の経済状況について、不安を覚える旨のコメントが随所にみられた。

以上の体験に裏打ちされたコメントは、ありきたりな言い方になるが、書き手の思いをことばで表現されたものばかりではなく、ことばで表現されていないことも含めて読み込めるとするのは、読み手の側の想像力もさることながら、共通した体験が支えとなって可能となるのであろう。

最後に、調査全般にわたって、自由に感想を書いてもらったものを紹介したい。

#### 1) 文章だけから性別を判断するのは難しい

- 昔であれば、男女の社会的役割の違いが大きかったこともあって判断しやすかったかもしれないが、男だから、女だからという考えが通じなくなり

つつある今では、判断はしにくくなっていると思う。(m)

- 現代では社会に出る女性も少なくないので判断しにくかった。(f)
- 近頃では、女性も男性化してきたので、判断に苦しみました。(A)
- 最近では、女性でも男性っぽく書ける人がいるので難しい。(m)
- 言葉遣いが乱れている世の中、男性か女性かと問われても区別が難しい。(A)

## 2) 年代の方が分かりやすい

- 年齢を読みとる方が性別を判断するより楽に感じた。(f)
- 全体に年配の方の文章だったので、あまり男女差の無い文章だったと思います。(A)

## 3) 体験、視点に男女差がある

- 男性と女性では視点等が違うので考え方も違ってくると思いました。(A)
- 着目しているところが、男性や女性によってちがうと思いました。(m)
- 過去の体験が男女間で受けとめ方が違うところから生まれてくるのではないかと。(m)

上であげた1) 2) について、文章だけで性別判断するのは難しく、むしろ年代の方が分かりやすいという指摘は、今回の調査で特に確認できたことである。投書という書きことばについてだけいえるのかさらに検討してみたい。年代の方が分かる理由として、言葉遣いの乱れや女性の男性化等をあげている。今回対象とした投書は、50代以上の書き手であるため、最近の状況がどこまで反映しているか定かではないが、投書文体からそう感じるということは、何らかの形で変化してきていると認識できるものがあるのだろう。

その一方で、3) のように、体験や視点の男女差も依然として存在していると考えられている。3で扱うように、男女のおかれた社会的状況が投書の文体や内容に大きく関わりあっていると認識している。

さらに、大学生、特に女子学生の感想には、授業でジェンダーを扱ったこともあり、自身のジェンダー意識への気づき、偏見についてふれている。

- 書いているテーマが難しいものだったら男性、感情的だったら女性とかいって推測している自分がいました。それは偏見のような気がしています。(f)
- 自分は平等主義だと偉そうに思っただけでも、こうして性を推測する時に、

自分にも実に多くの偏見があることに気付く。(f)

- この判断をすると、これは男がする表現、女がする表現とわけてしまいそうでこわい。(f)

授業のことを思い出しながら、回答したため、何らかのひっかかりを感じたのだろう。女性が(成人)女性のことを否定的に感じてしまうことの居心地の悪さを投書調査で実感したのだろう。調査によってこのような感情を抱くことになってしまった人には、さらなるフォローが必要である。この種の意識調査はやりっぱなしのままだと、その貴重な気づきに対して中途半端な状況においてしまうことになる。気づきのための有効な方法の一つとして投書調査を活用するためにも、調査者である私自身が心して取り組まねばならない課題である<sup>(4)</sup>。最後に、上述したもの以外で残しておきたいものをあげる。

- 書き手の情報(例えば60歳、男性、自営業)などを先に見てイメージしながら読んでいたか、逆に気付かされました。(A)
- 普段、書き手の性を見た上で、その性の視点に立って、読んでいる自分があったと実感。(A)
- 自分の書く文章をこのように調査してみたらどういう結果が出るのか気になる。(m)
- 今まで読んだ本などを参考にして男女を分けてみた。(m)
- 新聞投書の書き手の性別を判断するのは、推理小説で犯人当てをしているようで楽しい。(f)

書き手の性を推測するというのは、これまで受けてきた学校教育の中でも、または、人生においても、あまりすることはないかもしれない。3でさらに投書調査の意味を分析するが、これらの感想を読むと、投書調査がジェンダー意識調査として一つの有効な方法ではないかと改めて思う。

#### 1. 4 まとめ

2003年に行なった投書調査は、書き手の性と年齢に注目してみたが、結果は、回答者となってくれた大学生と社会人女性には共通した判断があることが分かった。つまり、投書の文体や内容における男女をめぐる認識やイメージが共通にあり、このようなジェンダー認識がある程度年齢を越えて貫徹しているといえ

る。また、書き手の年代の方が性よりも分かりやすいとする指摘は、「位相」についての新たな課題を与えてくれるものとなった。

最後に、今後機会があれば、社会人男性や小学生から高校生など、より多様な年齢の人たちに投書調査を行ない、文章に対する性をめぐるイメージ、認識を探っていきたい。

## 2. これまでの調査から分かること：投書内容の有効性

### 2. 1 これまでの調査の紹介

1995年から投書調査を行なってきた。1であげた2003年に行なった調査も含め、さらに全体的に総括し、現時点において、あらためて投書調査がジェンダー意識調査として有効であることを論じたい。これまでの投書調査といっても、もっぱら大学生を対象として行ない、人数もまちまちであり、また、調査対象の投書についても全てについて厳密に分析して選んだわけではないため、結果の妥当性について疑問が多く提出されると思うが、これまでの行なった6種類の投書調査を紹介しながら、みえてくることをまとめていく。

調査対象とした投書は、(1)ある日の投書欄に掲載されたものの全部をそのままコピーして行なったものと、(2)何らかの要因を絞り、選択した投書について行なったものがある。今回、6種類の投書調査を概観して改めて感じることは、正答率が、(1)の結果と(2)の結果にはそれほど差がみられなかったことである。つまり、全体として書き手の性を正解した割合は、以下にみるように、6割を越えており、依然として投書を読めば、書き手の性が分かるといえる。また、これまで行なった調査で、全投書について書き手の性を正解した回答者はそれほどいるわけではなく(1ケタ)、一方、全投書について書き手の性が当たらなかった回答者もほぼいなかったということも興味深い点である。さらに、回答者の性、年齢、専攻(文系、理系)等によっても差があまりみられなかったということも確認しておきたい。

以下、これまで行なった6種類の投書調査を紹介する(細かい数字は省略する)。

前半の3つ、表A、表B、表Cはある日の投書欄について、後半の3つ、表D、表Eは選択した投書を使用して行なったものである。

\*は実際の書き手の性と合わなかったもの

○は男性のパターン：文体であれば「だ・である体」

内容であれば、政治・経済等の公的領域を扱っている

(内容については私が判断して分類している)

「個人的事柄」:身内のことについてふれたり、個人的体験談などを記述している場合

(使用した投書は全て『朝日新聞東京本社版』に掲載されたもの)

●表の読み方

表Aにある投書番号①について、文体は「だ・である体」で書かれており、内容は労働組合について扱っているため公的領域に属するもので、個人的事柄への言及はなく、実際の書き手の性が男性で、回答者に判断された性も全体で90.1%が男性と判断している。

表A 1996年4月13日付投書欄 7通の投書 (男性2通、女性5通)

(1998年6月実施 男子学生 35名、女子学生 16名) 7通中5通正解 71.4%

投書番号	文体	内 容	その他 個人的事柄	書き手の性	判断された性(割合)
①	○	○労働組合		男性	男性 (90.1%)
②	○	○政治	孫	女性	*男性 (54.9%)
③	○	性格		女性	女性 (76.4%)
④	○	○ダム反対		女性	*男性 (62.7%)
⑤	○	○ダム反対		男性	男性 (70.5%)
⑥	○	いじめ問題		女性	女性 (72.5%)
⑦		園児への手紙	「おばあちゃん」	女性	女性 (96.0%)

表B 1997年12月5日付投書欄 8通の投書 (男性4通、女性4通)

(1998年6月実施 男子学生 9名、女子学生 44名) 8通中7通正解 87.5%

投書番号	文体	内 容	その他 個人的事柄	書き手の性	判断された性(割合)
①	○	○エンジン停止	娘	男性	男性 (56.6%)
②	○	○国際会議を		男性	男性 (62.2%)
③	○	ゴミ捨て反対	筆者:「僕」	男性	男性 (96.2%)
④	○	介護		女性	女性 (54.7%)
⑤		障害者		女性	女性 (96.2%)
⑥	○	親切		女性	*男性 (50.9%)
⑦	○	○自転車泥	孫	男性	男性 (77.3%)
⑧		空缶拾い		女性	女性 (54.7%)

表C 1996年1月5日付投書欄 統一テーマ「政治家よ」

9通(男性7通、女性2通)

(1997年4月実施 男子学生 11名、女子学生 43名)9通中7通正解 77.7%

投書番号	文体	内 容	その他 個人的事柄	書き手の性	判断された性(割合)
①	○	○		男性	男性(87.0%)
②	○	○		男性	男性(70.3%)
③	○	○		男性	男性(87.0%)
④		○		女性	女性(100%)
⑤		○		男性	*女性(66.6%)
⑥	○	○		男性	男性(88.8%)
⑦	○	○	妻	男性	男性(87.0%)
⑧		○		男性	男性(53.0%)
⑨	○	○	祖父	女性	*男女半々(44.4%)

表D 1995年10月3日付の投書8通から5通選択(男性4通、女性1通)

(1995年10月実施 男子学生 120名、女子学生 112名)5通中3通正解 60%

投書番号	文体	内 容	その他 個人的事柄	書き手の性	判断された性(割合)
①	○	○政治家		男性	男性(59.0%)
②		料理		男性	*女性(74.5%)
③	○	○金融		男性	男性(88.7%)
④	○	小学生の体格	姪	女性	女性(68.1%)
⑤	○	○仏の核実験		男性	*女性(59.4%)

表E 山一証券自主廃業に関する投書 8通(男性4通、女性4通)

(1999年~2001年実施 男子学生 298名、女子学生 237名)8通中6通正解 75%

投書番号	文体	内 容	その他 個人的事柄	書き手の性	判断された性(割合)
①		○責任		男性	*女性(59.2%)
②	○	友人	女友達	女性	女性(91.4%)
③		○再就職	個人的事柄	男性	男性(96.6%)
④	○	○経営陣		女性	*男性(79.8%)
⑤		○社員の今後		女性	女性(55.3%)
⑥	○	○私財提供	個人的事柄	男性	男性(91.2%)

⑦		母	母	女性	女性 (81.5%)
⑧	○	○責任		男性	男性 (82.4%)

表F 2003年の調査 5通 (男性3通、女性2通)

(2003年1月実施 大学生 73名、社会人女性 78名) 5通中3通正解 60%

投書番号	文体	内 容	その他 個人的事柄	書き手の性	判断された性(割合)
①	○	介護	友人	男性	男性 (88.0%)
②	○	ラジオ深夜便	母	男性	*女性 (70.8%)
③	○	ギンナン拾い	個人的事柄	男性	男性 (63.5%)
④	○	○核兵器		女性	*男性 (51.6%)
⑤	○	旅行	個人的事柄	女性	女性 (72.8%)

これまで行なった投書調査の全体的傾向をまとめると以下のようなになる。なお、具体例で使用する\*は不正解を示す。具体例は一部のみあげる。

<1>相互排除的性差の語彙がある場合：9割以上が正解

例) B-③

<2>文体と内容について、性の典型的パターンがある場合：6～9割が正解

例) 男性 「だ・である体」+公的領域 A-①, C-①

女性 「です・ます体」+私的領域 B-⑤, E-⑦

<3>文体と内容について、性の典型的パターンがあり、かつ、書き手の性が逆の場合(逆典型的パターン)：\*5～7割

例) 男性 「です・ます体」+私的領域 \*D-②

女性 「だ・である体」+公的領域 \*E-④

<4>文体と内容について、ズレがある場合：

男性、女性ともに 「です・ます体」+公的領域

「だ・である体」+私的領域

a) 個人的事柄(身内や体験談などの言及)がある場合：9割正解

例) E-②

b) 内容で判断される場合：5～7割

例) 男性 C-⑧



女性 A-③, \*F-②

c) 文体で判断される場合：5～7割

例) 男性 \*B-⑥

女性 C-④, \*E-①

細かくみればこれらのパターンにあてはまらないものもあり、それらについては今後の検討課題としていくことを念頭に入れつつ、以上のまとめから分かることを論じていく。

まず、第一に、投書に「僕」などの男女どちらかしか使えない語彙が使用されている場合、9割以上が性を正確に判断する。この語彙はアン・ボーディン(1975)のいう、相互排他的性差 (sex-exclusive difference) に分類されるものである。このような語彙は、日本語の特徴として現在幾つか存在しているが、将来、このような語彙が使用されなくなれば、性の判断には利用できなくなる。

第二に、投書には、文体と内容について、性による典型的パターンが存在していること、そして、そのことを回答者も認識しているということである。これについては、6～9割が性を正確に判断している。つまり、性によって異なるパターンが投書において存在していることを示している。

第三に、二点目であげたものの典型的パターンが逆の性の書き手によって書かれている場合、これをここでは便宜上、逆典型的パターンと称するが、典型的パターンを前提として判断しているため、そのイメージで判断している。しかし、この場合、何らかの要因が働いて、二点目の典型的パターンとは違い、5～7割しか当該の性を判断していない。

第四に、文体と内容にズレがある投書の場合、個人的事柄にふれていれば、性が分かる。これは、性によって置かれている社会的状況が異なるゆえに、それに伴い、経験や視点にも性による差が生じてくるという、まさにジェンダー関係が存在し、それを回答者も認識していることを示している。

そのような個人的事柄がない場合、文体か内容かで判断される傾向にある。判断に迷いが生じるため、どちらの性を判断しても、5～7割程度である。

要約すると、これまで行なってきた投書調査から、特に文体と内容のパターンに注目してみると、性によって典型的パターンが存在しており、また、それに裏打ちされたイメージをもっているということ、典型的パターンでない場合は、文体か内容のいずれかで判断される。また、個人的事柄が性を判断する際の要素となっている。つまり、投書は、性によって文体や内容にパターンがみ

られ、回答者は、年齢に関わらず、そのパターンを認識し、また、そのイメージを抱いている。投書の書き手の性がある程度分かるということは、現時点でも、投書に性による差がみられることを示してくれる。投書を読んで、書き手の性ではなく、書き手の出身地（都会か地方かというレベルでも）を推測するとしたらどうだろうか。かなり難しい作業になるのではないだろうか。投書に見られるように、日本語の書きことばに性差、性差のイメージがあるということが、1988年におきた埼玉での連続少女誘拐殺人事件の「犯行声明文」や佐々木（2001）の「ネカマ」の試みへの動機づけとなっているのである<sup>(5)</sup>。

## 2. 2 判断根拠にみるジェンダー・ステレオタイプ

これまでの投書調査において、書き手の性の推測のみならず、その判断根拠を自由にあげてもらっている。投書調査は書き手の性が当たったかどうかということのみならず、いな、それ以上に、ジェンダー意識調査として、また、回答しながら自身のジェンダー意識に気づく作業として有効であると指摘できる。熊谷（2002:26-38）でも述べているが、判断根拠に性をめぐるステレオタイプが存在しているのが分かる。本稿の1. 3でも紹介したようなジェンダー・ステレオタイプがこれまでの調査でも確実に表現されてきている。繰り返すが、これまでの調査から回答者のイメージする投書の書き手は、男性がサラリーマン、女性が（専業）主婦である。

具体的にあげると、「男は論理的、女は感情的」といったジェンダー・ステレオタイプが顔を出す。「男は仕事をしている（してきた）ため、社会と接点があり、専門知識も豊富だが、女は家事・育児に専念し、家庭内にこもりがちになるため、知識があっても受け売り（テレビのワイドショー等）にすぎない」といった見方が吐露される。専門的な事が書かれていても女性だと判断する場合、「キャリアウーマン」という、「専業主婦」とは異なったイメージで表象される。つまり、成人女性に対するイメージはあくまで「専業主婦」であり、働く女性は「キャリアウーマン」として例外的に扱われている。1984年にいわゆる有職主婦の数が専業主婦の数を越えているが、20年たった今でも、女性は家庭内にとどまり、もっぱら家事・育児・介護のみに従事していると思われる。また、イメージされている「専門知識」とは、政治・経済など公的領域に関わるもののみあてはまり、家事・育児・介護などの私的領域に関わるものにはあてはまらないと考えられている。

さらに、「論理的」「感情的」という表現の意味するところを具体的に思考し

ていくと、その表現のもつニュアンス、つまり、肯定的か否定的かといった評価と男女をめぐるイメージが結びついていることが分かる。

ステレオタイプに関する研究は、様々な視点からなされてきているが、森岡他(1993:16)での定義によれば、「社会心理学では、単純化され固定した紋切型の態度、意見、イメージなどをさす用語」となっている。上瀬(2002:7-12)では、「ステレオタイプの中には、単純なイメージのみで存在している場合と、否定的評価や感情を伴っている場合とがあり」、「この否定的評価や感情を含んだ場合に、知識は『偏見 (prejudice)』となって」くると説明している。さらに、ステレオタイプが現実をどの程度反映しているかどうかについては測定しにくいと指摘している。

ステレオタイプについては、私自身研究途上にあり、はっきりとしたことは言えないが、歴史的社会的な権力関係を抜きにしては扱えない事柄であると思われる。上瀬氏はステレオタイプの中で特に肯定的な評価や感情を含んでいる場合の例を具体的にあげていないのでどのようなものを想定しているのか分からない<sup>(6)</sup>。例えば、「黒人はスポーツが得意だ」といった、一見肯定的な評価が結びつけられているようなステレオタイプを考えてみた場合、この表現がはたして「黒人」に対する肯定的なイメージを示していると考えられるだろうか。スポーツ界において、比較的金銭のかからない陸上やバスケットボールなどで活躍する「黒人」選手が「白人」選手より目立って多くみられるため、そのような印象を受けるかもしれないが、このような表現も社会的文脈を入れて解釈してみると(社会的文脈抜きにはどのような表現も解釈できないが)、その奥には「黒人は知的なことは苦手だ」といった、「白人」と比較しての差別的発想がないだろうか。歴史的社会的に依然として差別的扱いをうけている「黒人」側にとって、どのようなステレオタイプも偏見に結びついているのではないだろうか。極論であるが、ステレオタイプ化されてしまったものは、ある意味で偏見であると考えられないだろうか。そもそもステレオタイプがどのような利害関心で形成され、維持されていくのかという点を歴史的社会的関係に結びつけて考えていく必要があるのではないだろうか。利害関心に対してニュートラルな形で生まれるステレオタイプは存在するのだろうか。この点については、今後さらに検討していきたい。

投書調査での判断根拠に関しては、性に注目して回答してもらっているせいか、一方の性を判断する際にもう一方の性を念頭に入れて発想する傾向にある。そのため、「～なので男である。女だったら～になるはず」という二項対立的発

想になり、かつ、女性の側に否定的なステレオタイプと結びつける傾向がある。また、女性回答者もそのようにイメージしてしまっている。

このようなジェンダー・ステレオタイプが何によって生じたのか、そして維持されてきたのかという点は、特に経済的側面から説明できる<sup>(7)</sup>。男女をめぐる経済的な状況をジェンダーから分析・考察している学者たちが鋭く指摘してきたことであり、私がことさら述べるまでもないが、性別役割分業体制により、男性を企業へ、女性を家庭にそれぞれ固定させ、また、賃金を得る者がそうでない者より高い価値づけがなされる社会において、生まれてくるステレオタイプであり、投書の書き手の性を判断する際にも必ず登場してくるものである。従来の性別役割分業が崩れかけてきているが、意識の上ではまだ根強く存在している。しかし変化の兆しもみえる。特に、女性の側が、同性に対する否定的イメージを抱いていることに気づき、1. 3であげたような違和感を感じるようになってきていることがわかる。

牧野(1979)は、アメリカ人学生と日本人学生を対象に書きことばをめぐる性別判断調査を行ない、アメリカ人学生に比べ、日本人学生の方に、強くステレオタイプ観念があると結論づけている。具体的にみると、日本人学生の方が、女性の書きことばに対して、論理性に欠け、感覚的・主観的であり、細かいところを書く傾向にあると判断している。

男女平等をかかげている学校の中で、教育を受けている学生ですら、このようなジェンダー・ステレオタイプを抱いている。このようなステレオタイプが判断根拠に見られる限り、このような投書調査は有効である。

### 3 投書という媒体による意識調査の有効性

これまで社会において、様々な意識調査が行なわれてきたし、行なわれている。その方法も多様なもので、また、回答方法も、賛否選択回答法や自由記述式回答法などがある。佐藤(2000:58)が「方法は結局のところ、思いつきを育て、先行の試みを学び真似しつつ修得する以外身につかないし、効果を反省し、批判を摂取するなかで発展させる以外には、積み重なっていかないだろう」と指摘しているが、私の試みてきた投書を利用した性別判断によるジェンダー意識調査も、思いつきによるもので、自信をもって行なってきたわけではなく、調査のたびに、本当にこれでいいのか自問することも少なくない。そして、そのたびに新たな課題も生まれてくる。

投書調査は、調査方法の回答による分類に従えば、男性か女性かといった数

値から分析する量的調査と、判断根拠を述べている自由記述欄を分析する質的調査の両方にまたがっている。今の段階で、投書調査は調査という形をとってはいるが、意識調査としてのみならず、回答者が自身のジェンダー意識に気づくための契機となる作業としても有効ではないかと考えている。

### 3. 1 投書調査のきっかけ

投書調査を思いついたのは、「女性の言葉で優しい記事を」というタイトルの男性会社員の投書を読んだことにある（1995年10月15日付「朝日新聞」）。筆者は、電車内で新聞を読む男性をよく見かけるが、女性のそのような姿はあまり見かけないということで、社内で「女性が電車で新聞を読まないわけ」をアンケート調査したという。その回答の中に、「新聞は男社会の話題が男性向けに“男語”で書かれているから」というコメントがあり、女性が読むためには、『優しい』語りかけるような記事づくり』をと提案している。この投稿者の指摘するように、新聞というと今だに男性と結びつけられたイメージが強くなるのは確かである。そこで、私は、さっそく新聞を利用して、「男語」「女語」のイメージは本当にあるのか、あるとしたらどのようなものであるのか調べてみることにした。新聞のことばといっても、記者が書いた記事ではなく、一般読者が投稿する投書を利用して、書き手の性が推測できるかどうか、大学生を対象に、単純な調査を試みた<sup>(8)</sup>。あまり深く考えずに調査をしたのだが、回収した回答を読みながら、詳細に判断根拠を書いていること、それも率直に吐露されていることに、私自身逆に気づかされることとなった。調査前はそれほど書かないだろうと漠然と感じていたが、その予想は見事にはずれ、その後8年間、このような投書調査を続けてみようという気になったのである。

そう決意するに至った理由が、もう一つある。当時は、授業において、ことばをジェンダー（フェミニズム）の視点から分析するという試みをしはじめた頃であった。その際、受講生である大学生の反応に、一種の抵抗感のようなものを感じてしまうことがしばしばあった。学校教育の場では特に、男女平等がタテマエであり、規範ともなっている。従って、歴史的社会的に、男女がどのような状況に置かれてきたのか、置かれているのか「ことば」から伝えてみようと思っても、私自身の説明不足も手伝って、説得力をもつにいたらないという悩みを抱えていた。「これまで一度も差別など受けたことはない」というコメントも出てくる。2000年に静岡市で行なった意識調査において、「あなたは、今からあげるような分野で男女の地位は平等になっていると思いますか」という

設問に対し、(1)家庭生活 (2)職場 (3)学校教育の場 (4)政治の場 (5)法律や制度上 (6)社会通念、慣習、しきたり といった項目ごとに回答してもらった調査がある<sup>(9)</sup>。その結果は、学校教育の場が平等であるとした割合が59.1%と最も高く、次に続くのは法律や制度上で27.4%にとどまっている。他の分野と比較すると、学校教育の場は、男女が平等に扱われている可能性は高いが、それでも具体的に検討していくと、学校においても、様々な課題（名簿順、制服、専攻の選択、入試合格点等）があることは、随所で指摘されている<sup>(10)</sup>。

このように、男女平等をタテマエとする、または、規範とする学校教育の場において、ことばをジェンダーから扱おうとしても、互い（学生と教員）の間にある妙な構えがとれず、実感のもてないタテマエだけの世界で話をしていくしかないような雰囲気が出てしまうのである。あからさまなことは言いにくい学校教育の場という社会的文脈がじゃまをして、ホンネが言いにくくなっている。その悩みの渦中で、投書という媒体を用いたジェンダー意識調査を行なうことに意味を見いだすこととなった。

### 3. 2 投書というワンクッション

例えば、男女をめぐる意識調査で、ストレートに以下のことを尋ねたとしたら、今の大学生はどう答えるだろうか。

「男の文章は漢字が多く、知的であるが、女の文章はひらがなが多く、難しいことはない」

「男は専門知識があるが、女はそれほどない」

「男は論理的で、女は感情的だ」

「男は視野が広く、女は視野が狭い」

このような調査は試みたことはないが、予想として、男女平等がタテマエの世界では、「同感する」と答える学生の割合はそう高いとは思われない。前述した、2000年に静岡市が行なった調査で、「男は仕事、女は家庭」という考え方がありますが、あなたはこの考え方をどう思いますか」という設問に対し、全体として、16.6%しか同感すると答えていない<sup>(11)</sup>。同様の問いについて、全国調査でも年々同感しない方向になっている<sup>(12)</sup>。つまり、上述したような設問を尋ねても、同感する学生は少ないだろう。

一方、投書を媒体にして、判断根拠を自由に書いてもらおうと（正解が分から

ない段階)、上述したような「男は～、女は～」的な記述が必ず顔を出してくれる。そして、そのような回答をしている自分自身に、なにかを感じるきっかけとなるのである。見田(1984)が、時代(明治、大正、昭和の初め、戦争中、終戦直後、現在)のイメージを色で尋ねる調査を行なっているが、直接尋ねるよりも、何かを通して間接的に表現してもらうことで、回答者のホンネが見えてくることがあるのではないだろうか。

では、なぜ投書という媒体を用いると、妙な構えがとれる、つまり、自身のジェンダー意識が表現されやすくなるのだろうか。これまで行なってきた投書調査の自由記述欄に表現されたことを分析してみると、投書を使うメリットは、第一に、かつて一度もこのような調査を受けたことがないという、新鮮さをあげている。文章の書き手の性を前提として解釈してきた側からすると、書き手の性を推理する作業自体が、構えを少なくするのだろう。回答者の感想に、「探偵」のような気分になるというのがよくある。

第二に、対象とした投書のテーマ・内容は、ジェンダーやフェミニズム等に関わっているものではないため、休日に新聞を手にとって気楽に読んでいるように、回答できるものであり、また、回答者自身の規範を問うているわけではない。第三に、当然のことながら、日本語で書かれているため、日本語母語話者であれば誰でも理解できるものであり、「国語」の理解力を問うているわけではない。かつて、印象に残った感想の中に、「二度目は一度目の反省をふまえて回答してみた」というものがあった。別の投書を利用して二度回答してもらったことがある。その感想を述べた人の正解はそれほどでもなかった。英語の前置詞の用法について、ある程度学習すれば、正答率も高くなる可能性あるが、投書調査の場合、(短期間に)「学習」しても、「上達」する可能性は少ないと考えられる。投書調査は、回答者の中にあるジェンダー意識、世間にあるジェンダー意識、実態をみつめる調査であり、このような意識は、小さい頃から(無意識的にも)形成され、内面化されてきたものがあるため、短期間の「学習」によって正答率が高くなることはないのである。

第四に、投書調査は、一通だけでなく、複数の投書を読むという具体的作業、つまり、能動的に思考を働かせる行為が関わっている。和田(2002:68)が、「読む行為が能動的な意味生成のプロセス」であると指摘しているように、投書の書き手の性を推測するのは、読み手(回答者)の人生体験や価値観を総動員して解釈していく行為である。そのような過程に、回答者自身の内面化した意識を意識化する契機が含まれている可能性ある。

最後に、この投書調査は、調査しっぱなしということではなく、その回答結果を回答者全員に伝えることも行なう。つまり、判断根拠等の自由記述を互いに共有することで、さらに、自分を見つめ直すプロセスがつくられるのである。これまでの投書調査において、書き手の性の判断が回答者の年齢、性、専攻に関わらず共通していることや、ホンネの部分を紹介すると、回答者の中に潜んでいた意識をさらに知ることになるようだ。投書というワンクッションをおくことで、回答者の構えが薄れ、よりホンネの部分表現しやすくなり、また、ことばで表現することで、自分と他人の意識をみつめる契機となる。

まとめていうと、投書を利用した調査は、現時点では、ジェンダー意識調査としてだけでなく、回答者自身のジェンダー意識に気づくきっかけ作りとしても有効であると考えている。

## おわりに

本稿は、「はじめに」で述べたような、これまで行なってきた一連の投書を利用した性別判断調査をあらためて総括しつつ、このような調査活動がジェンダー意識調査として、また、回答者のジェンダー意識への気づきのチャンスとしても有効であることを示そうとしてきたつもりである。この思いを強調しようとして、叙述が重複し、論理が迂路してしまったかもしれない。

「投書調査のきっかけ」でも書いたことだが、投書調査は、筆者のきわめて個人的な生活体験から出発したものではあるが、社会的にも重要な視点をなげかけてくれるものであると気づかされる日々である。男女共同参画社会を志向している（ように見える）日本社会において、このような投書調査が無効になる日がくるのだろうか。かつて、こんな調査をした人もいたと笑いながら懐古できる社会がくることを祈って、無効となる日まで続けていこうと思っている。

\*本研究にあたり調査にご協力いただいた静岡大学の学生の皆さん、浜松市男女共同参画室の方々、ならびに女性学級の受講生の皆さんに感謝いたします。また、調査方法を含めアドバイスをいただいた方々にも感謝いたします。



## 注

1. サラリーマンと主婦という分類について、朝日新聞紙面審議会での北城恪太郎氏（日本 IBM 会長）の発言にも興味深い点がみられる。読者像をどう想定するかという点に関して、氏は「全国の多様な読者が日々の紙面をどう見ているのか、十分調査してほしい。必ずしも投書だけが読者の意見ではないと思う。サラリーマンや主婦など、読者層に合った紙面づくりをしてほしい」と述べている（『朝日新聞』2003年3月15日付）。この感想から、氏は社会人を象徴的にサラリーマンと主婦などに発想し、興味関心に差があることを支持していることが分かる。
2. 金水氏は、その著書において役割語の定義を行なっているが、主に、話しことばを念頭においている。しかし、書きことばも含める旨の指摘もしている。（pp.66～67）
3. 小谷野敦氏がコラムで芥川賞受賞作についてコメントをしている（「ベストセラー快読」『朝日新聞』2003年3月23日付）。そこでは、受賞した女性作家の作品についても語っているが、「短くて文章が平易で（今回はひらがなも多い）」とわざわざカッコで括りながら、ひらがなの多さに言及している。ひらがなが多く使われていると、文学作品としては評価が低くなるといわんばかりの論調がみえかくれしている。ここにも、男女の文章を漢字とひらがなから発想する状況があることを示している。
4. 戦後、男女平等を唱えている学校という文脈において、教育を受けてきた学生には、成人女性に対する否定的イメージを抱いてしまっていることにはっとすることもあろう。将来、自分が同様な立場になる可能性を思えば、他人事ではなくなり、本当は気づきたくないものだろう。
5. 斎藤（2002:254）は、「衣服（文章）は（中略）、年令、性別、役割、階級、地域、財力などに、じつは深く規定されている」と指摘している。
6. Edgar, F. ed (1992:117-118) では、肯定的なステレオタイプとして「アジア系アメリカ人は数学に強い」、否定的なステレオタイプとして「女性は数学が弱い」という例をあげている。仮にテストの点数などの裏付けがあって形成され、維持されているステレオタイプとしても、「アジア系アメリカ人が数学に強い」ということを単純に肯定的なものとして扱えるかどうか疑問を感じる。「白人」のアメリカ人に比べ、アジア系アメリカ人もしくはアジア人は計算に長けて、金儲けがうまいということを含んでいるのではないかと勘繰ってしまうのである。

7. 久場嬉子編 (2002)『経済学とジェンダー』を参照されたい。
8. 朝日新聞社に、投書について問い合わせをしたところ、投書を掲載する上で、原則として、原文を調整しないということであった。
9. 詳しくは、静岡市 (2001)『男女平等社会にむけての意識調査 結果報告書』43～49 ページを参照されたい。
10. 例えば、天野正子・木村涼子編 (2003)『ジェンダーで学ぶ教育』を参照されたい。
11. 詳しくは、静岡市、前掲書、31～32 ページを参照されたい。
12. 詳しくは、犬伏由子、椋野美智子、村木厚子編 (2000)、39～42 ページを参照されたい。そこでは、1980 年代以降、男女の役割についてのジェンダー意識が変化し、「夫は仕事、妻は家庭」という性別役割分業を否定する考え方が浸透してきたと述べている。しかし、一方で、具体的なレベルにおいて、家事は依然として女性が担い続けているという点も指摘している。「現実の変化は意識の変化よりも遅い」と結論づけている。この点について、投書調査からは、意識の方が現実よりも遅れて変化していることが示唆されている。それぞれの意識調査の特徴（メリット・デメリット）がこのような結論を導いていると思われる。つまり、現実と意識の関係については、どのような意識調査を行なうかによって結論が変わりうる場合があるかもしれないということである。今後、意識調査の方法論としても、考えていきたい点である。

## 参考文献

- 天野正子、木村涼子編 (2003)『ジェンダーで学ぶ教育』世界思想社。
- Bodine, Ann (1975)Sex Differences in Language. In Barrie Thorne and Nancy Henley eds., *Language and Sex: Difference and Dominance*. Newbury House. 130-151.
- Edgar, F. Borgatta ed. (1992)*Encyclopedia of Sociology*. vol.1 Macmillan Publishing Company.
- 江原由美子 (2001)『ジェンダー秩序』勁草書房。
- 遠藤織枝 (1997)『女のことばの文化史』学陽書房。
- 現代日本語研究会編 (1997)『女性のことば・職場編』くろしお出版。
- 波多野完治 (1955)「男の文章、女の文章」 宮城音弥編『ことばの心理』河出書房。
- 日尾康子 (1996)「性差と発話行為にみられる力関係—発話の量と内容からの考

- 察一』『四国学院大学論集』第90号、85-98.
- 犬伏由子、椋野美智子、村木厚子 (2000)『女性学キーナンバー』、有斐閣選書.
- 岩永雅也、大塚雄作、高橋一男 (2001)『社会調査の基礎』放送大学教育振興会.
- 寿岳章子 (1979)『日本語と女』岩波新書.
- 上瀬由美子 (2002)『ステレオタイプの社会心理学』サイエンス社.
- 金水敏 (2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店.
- 久場嬉子編 (2002)『経済学とジェンダー』明石書店.
- 国緒英子 (1987)「投書のパターンと表現」『言語生活』431号、10月号、筑摩書房、42-46.
- 熊谷滋子(1996)「女の文体の移り変わり—過去40年間の新聞投書をめぐって—」『人文論集』静岡大学人文学部 第47号の1、263-75.
- 熊谷滋子 (1997)「投書とジェンダーをめぐって」『人文論集』静岡大学人文学部第48号の1、345～62.
- 熊谷滋子 (2002)『新聞投書とジェンダー意識調査・研究 (男女共同参画社会に向けて)』科研成果報告書.
- Lakoff, Robin (1975)*Language and Woman's Place*, Harper Torch Books.
- Lippmann, W. (1922)*Public Opinion*. Harcourt Brace. 掛川トミコ訳(1993)『世論 (上・下)』岩波文庫.
- Makino Seiichi (1979)Sexual Differences in Written Discourses. *Papers in Japanese Linguistics*. vol.6 195～217.
- McConnell-Ginet, Sally Borker and Nelly Furman eds. (1980)*Women and Language in Literature and Society*. Praeger.
- 見田宗介 (1984)『新版現代日本の精神構造』弘文堂.
- 森岡清美他編 (1993)『新社会学辞典』有斐閣.
- 中村桃子 (1995)『ことばとフェミニズム』勁草書房.
- 中村桃子 (2001)『ことばとジェンダー』勁草書房.
- 中西清美 (1992)「日本語と性差」『女性学年報』第13号、十月号、日本女性学研究会、91～103.
- 西村典子 (1998)『投書のすすめ』文芸社.
- れいのるず・秋葉かつえ編 (1993)『おんなと日本語』有信堂.
- 斎藤美奈子 (2002)『文章読本』筑摩書房.
- 佐々木由香 (2001)「『ネカマ』のすすめ」斎藤美奈子編 (2001)『男女という制度』岩波書店、81～104.

佐竹久仁子 (1995) 「女の文体・男の文体」『ことば』第 16 号、現代日本語研究会、52～68.

佐藤健二 (2002) 「厚みのある記述」今田高俊編『社会学研究法 リアリティの捉え方』、有斐閣アルマ、48～82.

静岡市 女性政策課 (2001) 『男女平等社会にむけての意識調査 結果報告書』

武田春子 (1990) 「言語性差のステレオタイプ」『女性学年報』第 11 号、十一月号、日本女性学研究会、28～39.

田中章夫 (1999) 『日本語の位相と位相差』明治書院.

和田敦彦 (1997) 『読むということ』ひつじ書房.

和田敦彦 (2002) 『メディアの中の読者』ひつじ書房.

### 資料 (1)

投書にみられる、書き手の性による典型的パターンを紹介する。

(a) は文体が「です・ます体」であり、内容が料理のことについて書かれており、身内についてもふれている。一方、(b) は文体が「だ・である体」であり、内容が金融を扱っており、身内のことや個人的事柄には一切ふれていない。(a) は女性の投書で、(b) は男性の投書である。いずれも、『朝日新聞東京本社版』からである。

(a) 「たたき梅」は我が家の宝物 (女性、主婦、71 歳) 1999 年 10 月 19 日付  
暑さが去り、冷たい風が我が家の庭の緑を吹き抜けて行く。心の中まで、さわやかになるようです。

食卓に並ぶ、ひときわ赤い「たたき梅」。夫との静かな朝食に、香りと彩りを添えます。考えてみますと、暑さに弱い私が、何とか夏を乗り越えられたのも「たたき梅」のお陰かな、とも思っています。

じっくり漬ける梅干しと違い、漬けて二日ぐらいで食べられる「たたき梅」には、何か新鮮な、体に良い成分があるのかな、とも思えます。

七月半ばに硬い青梅の種を取り、実を五ミリぐらいの、さいの目に切り少量の塩でもみます。次に市販の赤いシソ漬けを刻み、梅とよく混ぜると、きれいなしそ色に染まります。これをボウルに入れ、ふた代わりに皿をのせ、一晚漬けます。

翌日、全体をかきまぜ、ガラスびんに入れます。細かい梅と、シソの微妙な風味の赤いカリカリした梅の出来上がりです。

この「たたき梅」は、しゅうとめから受け継いだ、優しさのこもる贈り物なのです。東京と山形に住む孫たちも「カリカリして、すごくおいしいよ。」と言ってくれます。天国のおしゅうとめさん、本当にありがとう。娘たちにも大切に伝えていくつもりです。

(b)「歓迎すべきか巨大銀行誕生」(男性、無職、61歳)1999年10月23日付富士、第一勧業、日本興業の三銀行が事業統合を発表した時、厳しい世の中になったものだと思ったが、今度は住友銀行とさくら銀行が旧財閥グループの枠を越えて合併するとのニュースに、二度びっくり。

日本版ビッグバン(金融大改革)が始まったころ、経済評論家の諸氏が、都市銀行で生き残るのは三、四行だろうと推測されている記事を読んで、まさか、と思っていたが、それが現実味を帯びてきた感じだ。

世界で一位、二位の銀行が誕生することは、日本の金融システムの安定化につながり、ひいては国際的にも信用回復になると、政府・日銀筋は歓迎しているようだが、当然ながらリストラ問題が大きくクローズアップされてくる。住友・さくら両行で今後四年半の間に、九千三百人の人員削減を進めることになっているが、これらは氷山の一角に過ぎない。

銀行の合併による産業界の再編は企業の統廃合につながり、その影響によって企業は一段のリストラを目指さざるをえない結果となる。雇用問題はますます厳しいものになり、社会不安を起ししかねない。

民間需要の回復が弱い現在、巨大銀行が誕生することを喜んでばかりはられないのではなからうか。

## 資料(2)

2003年の投書調査で対象とした投書の具体例

### ①介護の重圧は解消できるか

知人が発作を起こして入院した。公立の基準看護の病院である。知人は幸い意識は確かだが、自力ではほとんど何もできない。

病院は家族が介護するようにと要請した。そこで今八十歳になろうとする彼の妻とすでに他家に嫁した娘と、これも他家に嫁した孫娘の三人が、交代で介護に当たっている。

基準に満たない看護婦数の中小病院ではどうするのだろうか。現在は患者の負担で付添婦を頼むことができる。しかし明年はこの付き添い制度を廃止する

という。この場合でも恐らくは家族の介護が期待されているのだろうか。

いずれにしても医療費はできるだけ切り縮めようという発想で、特に老人にはなるべく金をかけたくないという趣旨である。したがって将来とも病院内家庭介護は消滅すまい。

ましてゼロから始める介護保険はどういう内容になるか、見当がつく。鳴り物入りではやし立てられ、現在介護の重圧にひしがれている家族は、わらにもすがり気もちで介護保険に期待させられている。危なっかしい極みだ。

## ②現代人いやすラジオ深夜便

かつては若者のものだったラジオ深夜放送が、最近、中高年層を中心に大もての様子だ。そういう私も、NHK「ラジオ深夜便」の大ファン。

世の中には、悲しみを抱えて日々暮らす人が、なんと多いことだろう。寝たきりの夫を介護する老いた妻、二十代で逝った息子の死を受け入れられない母。そうした人たちの思いに触れ、胸がふさがる。

亡くなった母は、目が少し不自由だったこともあって、ラジオ深夜便が無二の親友のような存在だった。午後九時ごろには、ポケットラジオを小わきに抱えて二階の寝室に向かう母の後ろ姿が、懐かしい。

現代人はだれもが忙しく、気持ちがささくれ立つのだろう。他人のことにかかずらう暇などはないに違いない。だからこそ、ラジオ深夜便が、心に潤いを与えてくれるよすがとして、多くの人から熱い支持を受けるのだと思う。それは、今が寂しい時代だという何よりの証拠なのかもしれない。

ラジオ深夜便は、これからもずっと、多くの人々の心をいやし続けることだろう。

## ③ギンナン拾い秋の味楽しむ

実りの秋は、ギンナン拾いも楽しい。黄葉に先駆けて落ち始めるので、九月下旬から夕方のランニングのついでに少しずつ拾い集めていく。

風雨の後などは夜明けを待ちかねて拾いに出かけるが、そんな日は同好の士に先を越されることも多い。その時は悔しいが、「今度こそ」と次の機会を待つ。拾っても拾えなくても、ギンナン拾いが好きなのである。

あめ色に熟れた実は大変なおいだが、二、三粒を部屋に持ち込んで下手な絵を描くこともある。

拾った実は、水につけたり、土中に埋めたりする人もあると聞くが、私は戸

外の水道で洗いながら種を押し出し、数個ずつ手のひらでもみ洗う。ぬめりが取れたら、ザルに入れ、太陽でしっかり乾かす。

ギンナンは茶わん蒸し、炊き込みご飯に入れるのが一般的だ。だが、私は、フライパンで煎って、ひすい色の中身を取り出し、熱いうちに食べるのが一番うまいと思う。

高くそびえる木から落ちてくる実は、まさに自然の恵みであり、いつもイチョウの木に感謝しながら拾っている。

#### ④核兵器「違法」英判事に拍手

先日の本紙で「小さな町の法廷の大きな判断」という記事が掲載された。「核兵器は国際法上、違法である。これを無くそうという行動は犯罪を防ぐためのものだ」という主張が通った判決だ。

今年六月、核軍縮運動に共鳴している三人の女性が、英国・スコットランドで海軍基地ファスレーンに忍び込み、核搭載原子力潜水艦トライデントの付属施設である「はしけ」の実験設備の一部を破壊して逮捕された。

しかし先日、地元のグリーノック治安判事裁判所で、ギムブレッド判事は、弁護士の「国際司法裁判所で、すべての核兵器は違法とされている」ということを基本に据えた主張を認め、三人の女性の放免を決定した。

こうして、トライデントの存在を違法として強く示唆したことは、快挙だと思う。今後、上級審に持ち込まれても、覆ることのないよう祈る。

三人の女性の行動も、私の心を打ったが、同時に小さな町の法廷の判断には拍手を送りたい。日本の裁判所も、こうした動きに大いに注目してほしい。また、これに関連して、我が国も国連で、核廃絶に向けての新アジェンダ連合の決議案に、ぜひ賛成票を投じてもらいたい。

#### ⑤不況の景色を旅行先で見た

五日から二泊三日で、山陰のバック旅行に参加した。安さで選んだ旅だから、粗末な宿屋や食事は覚悟の上。ところが意外にも、ここ十数年来の接待を受けた。「この値段でどうして？」の部屋や食事。冷めた汁は一回もなかった。

喜んだのはそこまで。山陰地方では有名な温泉街の夜は、私たちのほかに客の姿はなかった。明かりの消えた宿が軒をつらね、玄関先の「〇〇様ご一行」の札は空白。不気味な雰囲気。これが不景気の正体だった。一行が乗ったバスは三台。泊まる宿に着いてみると一台だけ。客を分け合っていたのだ。

名前の知らない魚がついたので、仲居さんに聞くと「お客が入った時だけの仕事なので、分からない」との返事。部屋に迷ってしまって、フロントに座っている人に聞けば、困ったように首をかしげる。かなりの高齢者である。

お土産屋では多種類のお菓子やナシの試食品はあつという間になくなり、買い物袋を下げてくる人は本当に少ないのも驚きだった。旅行参加者はほとんどが年金組。財布のひもをしめれば何とか命はつなげ、たまには安旅行も出来る。しかし、あらゆる努力をしても、しめるべき財布のないひん死の業界を実感した旅だった。